

瓶乃茶代紙  
全

特別  
利  
998  
1



門へ和9

號 998

卷 1-2

鷺幽霽箸

狐乃茶袋衣

知新堂梓



和歌之有俳諧猶大雅典型外

有<sub>カ</sub>性記裨官而俳諧中亦有俳

諧雖醜陋俗惡之事靡不<sub>ル</sub>取<sub>テ</sub>而

上<sub>セ</sub>題愈出愈幻愈出愈奇乃所<sub>イハ</sub>

謂<sub>ル</sub>一句立者<sub>カ</sub>是也頃者門下諸

子仿<sub>ニ</sub>三都句戰之例<sub>ニ</sub>設<sub>テ</sub>吟壇<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>  
募<sub>ニ</sub>四方之句<sub>ヲ</sub>推<sub>テ</sub>余<sub>ヲ</sub>為<sub>ニ</sub>俊成<sub>ノ</sub>余曰<sub>ク</sub>  
有<sub>ル</sub>是哉<sub>カチ</sub>醒世覺世<sub>モ</sub>亦不外<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>竟<sub>ニ</sub>  
彙成<sub>テ</sub>一編<sub>ト</sub>題曰<sub>ク</sub>狐茶袋<sub>ハ</sub>狐茶袋<sub>ハ</sub>  
蓋<sub>シ</sub>野草之名也<sub>ナリ</sub>適<sub>ク</sub>有<sub>リ</sub>贈<sub>ニ</sub>予<sub>ニ</sub>此<sub>ヲ</sub>

者<sub>上</sub>因<sub>テ</sub>假<sub>テ</sub>名<sub>ク</sub>此書<sub>ニ</sub>此書<sub>ニ</sub>急<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>上梓<sub>ニ</sub>  
匆<sub>ク</sub>匆<sub>ク</sub>卒業多<sub>シ</sub>所遺<sub>ト</sub>脫<sub>ス</sub>則恐<sub>ニ</sub>迎<sub>ニ</sub>西<sub>ニ</sub>  
行<sub>ニ</sub>法師之怒<sub>ヲ</sub>也<sub>キ</sub>當<sub>ニ</sub>姑<sub>ク</sub>候<sub>テ</sub>他<sub>ノ</sub>日<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>  
出<sub>ス</sub>後<sub>ト</sub>編<sub>ヲ</sub>耳<sub>ニ</sub>嗟<sub>フ</sub>乎<sub>ニ</sub>世<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>排<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>雖<sub>モ</sub>甚<sub>ク</sub>  
多<sub>シ</sub>使<sub>テ</sub>讀<sub>ム</sub>者<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>終<sub>シ</sub>篇<sub>ヲ</sub>而束<sub>ニ</sub>諸<sub>ノ</sub>高閣<sub>ニ</sub>

何也其非拔華故也予不敢刻  
舟求劍矣

丙子正月

鷺幽靄自叙

後水尾院清製

清すまきけなまがらしく巧社宇  
干丸や汐の干涸れすて小舟  
飛こくて釣や島乃らうとて

風蕨のまきこより山里にすむ煙きつて  
風雅乃らるの同くたれは抄されたる  
これと巻首ふ表をて

早蕨や清きまきこむる宴ら又  
葉の花や枝をけりける山巨事り  
ふる波の一疾泊りやうき水  
近にノ香  
枝子  
梨一  
奇川

息杖乃石に大石をく枯聖京 蕪村  
 やつらふ人日けり新也 晴角力 几董  
 水も流る新也 梅遠柳 定雅  
 寝とれいさぶ柿夢りきりたて 魁坊  
 誦場也 色もく人う新あり 南尺  
 世の中一ハ二カ足ぬまふ振つり那 琴太  
 下とくうまなをくかり寝乃花 秋凡  
 花らりてかすいさうりたをいんこる 三平亮  
 白真や汝鯨乃 幽虚り 系傳  
 菴の書葉屑すてくも角を武 成美

唐崎乃松うけはあし冬未立 白夜  
 一人ゆた二人ゆき指夜きぶ 宋居  
 雪の代産や戸柳のまは秋月 孔阜  
 涼風や多にうさうさの情まき 携良  
 夕々れや寝て又吹秋の風 紗石  
 十月ハ舟け程乃日あつ神 青蘿  
 行書やさまりくありく妻中 伯及  
 系と歩く麻きく人とあふたり 尾州  
 後多折てさうりき程の程う形 尾州  
 そは日やねさうさうて新 岳輅

野航乃家入さりかてつ〜  
 九岳  
 かのまゝあゝ起し〜  
 曉窓  
 出か目りよ故きく〜  
 浮汎  
 宿東乃を宿不剥中〜  
 彦寧  
 去し身やうら〜  
 薄房  
 下ま〜  
 乙二  
 つ〜  
 鐵船  
 松崎や萩乃萩〜  
 五明  
 秋のうれ位〜  
 於叟  
 本枯や等も〜  
 可於里

四月やよ〜  
 水  
 開け〜  
 閑更  
 涼〜  
 葉窩  
 秋の萩〜  
 蒼軌  
 新〜  
 千代  
 人言〜  
 陵  
 五〜  
 荒虫  
 昔〜  
 宋豆  
 杖の存〜  
 桑河  
 早〜  
 白雪



前より目の前の糸公よりこの句へは往因  
子にゆきつて別後乃奇藝あり

奥の山や雪はよとる神これ 作者不知

白の山や雪のよとく自れ雲 雄上

白山乃雪の下なる志これ云 康更

五の山や雪のふたれ雪の云 眉山

右第三子乃句へ大抵同一物眉云が句造

佳絶なり雪は風とつらむる夏に妙

まゝん

天の明成申事於共史

美の山や雪のよとる神これ 宋愚

鴨望む園乃雪の山や月これ持 菜窩

此句と後冊にうつけてゆられざる也

月盗む小使持の山 刀自の持 尻主

右予が此河先君渭陽宋愚翁先昨荒史云

乃の句は別小主人と情てこれと懐きて予が

新まはかして此書りせ一句互勝句と云

西風を句も又缺へきよあり次は小一二

語の語と其例は備ふ

附録



平礼法大人園歌不體

正雅

正俗

國歌

鶯ありて鶯井ふううう  
幸哉乃杉を花より歌て  
花も晴るも野ふうう歌り  
名月や波とりてら歌り  
百歩や歌うううと打ち目  
誰やううう歌り花め  
梅ううう歌り日月の影  
是ううううううううう  
ううううううううう

正雅

俳諧

正俗

國歌

あまのうらふ草やまらううう  
かきううう八草花のうう名やうう  
ちりんううううううううう  
道ぬらん歌ううう四十一  
よのううううううううう  
る小貝ううううううううう  
ううううううううううう  
泥やううううううううう  
始くううううううううう  
大鳥踏は片舟乃説

子音の白り

積古の記に古事紀日本紀あり十七書成の  
十九を乃く瓜片款と云ふをり古事  
一) 仇緒の部あり一和款の一體なり  
さねは惣名と序うて一唱く一そ中  
是ハ正風神これハ瓜の神なりやわら  
り一) 仇緒と惣名と云ふは總て  
中やのなりく一) 瓜片款より一  
より一) 仇緒の部あり一和款の一體なり  
なれ一積古の記に一和款より一和款の一體なり

曰く瓜の白りは奇れ之白なり一) 瓜片款  
一) 瓜の白りは奇れ之白なり一) 瓜片款  
と一) 瓜の白りは奇れ之白なり一) 瓜片款  
句の如く一) 瓜の白りは奇れ之白なり一) 瓜片款  
一) 瓜の白りは奇れ之白なり一) 瓜片款

瓜片款の事

かゝる瓜片款の事一) 瓜片款の事  
瓜片款の事一) 瓜片款の事  
瓜片款の事一) 瓜片款の事  
瓜片款の事一) 瓜片款の事  
瓜片款の事一) 瓜片款の事

下横もつた人ハアカの返アカアの返カイカの返  
 アキヤの返カモ皆括入イヤの返アヤイの返イ  
 イクの返ウキウの返クモ皆立事ニ幾字防て返  
 しては例へアノの返ナのみ一余ハ此等知  
 ざる一初学切韻の次第文家小笠ふ  
 と云ふべし

初 體 用 令 序

ア イ ウ エ オ  
 カ キ ク ケ

サ シ ス セ ノ  
 タ チ ツ テ ト  
 ナ ニ ヌ 子 ノ  
 ハ ヒ フ ヘ ホ  
 マ ミ ム メ モ  
 ヤ 井 ユ エ ヨ  
 ラ リ ル レ ロ  
 ワ イ ウ エ

かまつゝみのを  
 多く追世哲  
 のよにゆかり  
 祥たる事ハ  
 去についで  
 まま

中院公道卿侍和禰一ある者まふ

アトてはけの世に是附とるまゝくやかり  
あの人より人野ふりる人

は乃人の壬申の猿ぢやが子賣

け句長者も鳥の如くまらき乃  
物もまらきとて人野出づるが

まら

又如く壬申の猿ぢやが子賣

とけくは長者又勝る人あげ

ヤケ目も是より字類乃是別

ひつとをあらと作らざるまら

すふふすふはが吹くゆれに

舟箱乃日れてくらうなかも

ほつ更といふは珠おとるら

まかにあはたす舟とれとら

あはたす

梅乃花のうらふ字うゆ

ふはつとて奇しうはうゆ

内東都人天宮乃清宮

あはたすをあはたすはあはた

や芳の春ゆかりとてあはた

某公

玄法下

治五元政

山崎宗鑑

くまは

陰志

雲報

小男と雛乃奏者、<sup>いす</sup>搦ひたり、  
子と女やまら、<sup>いす</sup>ほりて、  
乗捨

比叡の梅

くる月あり、<sup>いす</sup>の鼻も、  
し由

枯守

へ上へ下へ下さ下せ下の袖音ぶ、<sup>名所</sup>白水  
はるのそ月、<sup>いす</sup>わくし

い合終入い口物流

あつた乃序とあつてふ、  
ま付

附 きいふい合終も、<sup>いす</sup>あつて

さうらうと、<sup>いす</sup>あつて

市助、<sup>いす</sup>あつて

あつた、<sup>いす</sup>あつて

いれ、<sup>いす</sup>あつて

つ、<sup>いす</sup>あつて

あ、<sup>いす</sup>あつて

あり、<sup>いす</sup>あつて

あ、<sup>いす</sup>あつて

あ、<sup>いす</sup>あつて

あ、<sup>いす</sup>あつて

世をくろく人厨よ入公らん

羽州

七泉

ゆらゆらとゆくゆらゆらとゆく

雪報付代滿方秀百人のあつちやうや

一二たふさうして童子乃準則と云

雪乃くさくさ 紙敷きとゆ

流くくさくさ馬天狗あつちやう

ういまのくさくさ困が丁云

かからまの下の下にゆくさうまは

けりはうさうさうさう

ゆらゆらとゆくゆらゆらとゆく

うらうらとゆくゆらゆらとゆく

羽名のはらとゆくゆらゆらとゆく

まきゆらゆらとゆく

権乃くさくさと極く 其巻のんあて

雪のくさくさと極く

あまをとい自を天まをうらうらと

いろりのあまへ舟りさせ入

すき焼くのをたすにはうさあ

ゆらゆらとゆく

千里り虎も竹中の半れ供

らんらんらんわき声乃らんまよ  
らんりの懐ふつひけるらんのみ  
に角文もあまのあまのあまの  
る乃子の紙とて丸うすはるせに  
れーに角ーちー燈ー  
ずりかきこらんたがま燈のあまのち

○ 南をけりほ他ありがらりこ丸の皮

謎四

宰相とてうふかりて虎乃路をきる

系珠

ほのぼのほのぼのわすれまじ史の一声

望

さうんても海の世界乃さうの神  
—— さうの神の鏡とて  
—— 力の世をさの細がなる  
—— ちのちの梅乃わつてどく

小舎附

月懸るききききききききききき  
色懸るききききききききききき

花のさきとまふよはくろくし

七字の歌

らんどのまふしるまのひのまふが

見立

驚ゆふの西水乃神のはほはれ

よしたもきうのなふりのでん

今持のまにちりりときもわん

真極のまてはげん

昔後よお入るやうとさきこえ

あうふとまのいかなるや

お原乃持命と門のまの指

うんごうまふひーやうけりめり

い原一まふひ 風をぬれ

まぬうらまふ切まふふまふ

あうなうらまふ



男 うちのまふ命もたすの原ちと行まふ

女 うちのまふ命もたすの原ちと行まふ

あんどまふく相もらん

□ こまもつがまふもたすの原ちと行まふ

三



七、ア、ム、ウ、シ、田、中、十、雨、上、野、山、山、野、本、と、ア

五  
口  
上  
矢

と、老、松、是、一、行、り、の、で、ご、び、り、き、ん、  
これ、う、是、は、五、唯、知、足、ハ、ア、この、  
ま、い、ん、か、ら、い、り、や、め、  
十文字

い、つ、ま、も、も、に、東、ろ、が、い、こ、い、ま、  
ま、い、ん、  
其

勢、い、せん、い、ん、ま、ん、ぢ、ら、  
ち、り、山、  
其

つ、く、ま、ん、い、り、  
ち、り、山、  
其

風、鈴、も、鈴、が、か、た、か、た、ら、り、や、ま、  
ち、り、山、  
其

あ、う、う、雨、雨、雨、雨、雨、雨、に、り、  
ち、り、山、  
其

あ、う、う、雨、雨、雨、雨、雨、雨、に、り、  
ち、り、山、  
其

日

扉、待、き、り、い、の、ま、ん、い、の、が、る、

大、併、鹿、と、こ、い、り、門、ま、ご、う、ん、入、

一、木、都、前、白、洲、

く、く、く、く、く、く、く、く、

丸、あ、と、こ、古、で、ま、う、ら、う、う、葉、あ、り、

あ、り、い、り、一、白、立、

は、い、し、乃、鹿、や、十、文、を、り、こ、の、池、

金、砂、挽、扇、り、よ、る、も、あ、り、ぐ、く、せ、

太師冠者つゝ一足で暮へつき  
耕子賣喰噓とまてを扱ひて  
まつやの仁王乃亮臥けく仁呼  
涼直美つゝおんをいさぐの書り  
くひまのうたむらうまらるゝより  
居はよどいりなほまのしり  
居はまきやうたむらうまらるゝより  
我鹿谷つゝおんをいさぐの書り  
新新牛天下  
水徳より川軍へかとうりそら

新新牛天下

雞頭いよはせ乃十夜うね

曾根夜打

足才り新々合も他ほくきん

同十書切

武虎野や石二乃若のそけや

右撰者より知と野ふ百人乃句とらて

けくまむひうし有しり

近々妻で豆白紙つくる後乃如きれおん如撰

牛乃もくの如牛おんが軍さねがふら小眠

食をたふふ時きれ人もその節戯とて  
若すふくくはくもくもくおれけうのり  
はくしほくしおくはくやすおく  
あて白すふくはくはくし都人の白け  
世ふはくはくはくはくはくはくはくはく  
そのはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
傾城の酒で花入り居振がかりの  
ちんぼくはくはくはくはくはくはくはく

ふはくはくはくはくはくはくはくはく  
ふはくはくはくはくはくはくはくはく  
本殿の足袋がまきふあまのり  
つはくはくはくはくはくはくはくはく  
まきふあまのりはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
先陣の足袋がまきふあまのり  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはく

ひろくを浮うき撃うくつてあせ  
時清う一つにやんて抱きつた  
酒持よかりなると憂ふ抱てくれ  
まうとまをらうしとてあはれ  
人ともあめく蒲田のあづき  
盗人のなふ世しめく風ひら  
舞をじにほが情く泣くゆ  
小坂より口には尻尻りあまのき  
大佛り権くくして居られけ  
まん丸りやうで押ぶせらうり

古めどが移のくつあふふけて居る  
瘦ぼくやきりつてつわや  
先ずくしてうらや憂ふてふや  
けさうが親の故やりよめて居る  
来つき乃をばとたうたうて  
室談の影ぼくあふらちせり  
化物くく之結うとくふたれを  
そ救医者の門く迷道立て居る  
らうまふ五徳が踏ぬ踏や居る  
雨ぶれのゆ儀を風くくけり

欄干に暮の雲と暮てとつて  
雪危う刺と云くちふと出を  
しちの移り海へ一筆でみる  
侍りこけては先かうちをり  
人まと百足のやうにいつては  
つとくから業流なとてはあが  
り花がきくやで二階へよりを  
人寺がサア渥てきくよひのらぬ  
おぼえふふ入らぬれとつて  
迷ふ虚がふまふかけてさきなる

ゆつとくづけく腹とさきと  
糸の眠りが床へさきと舟の  
つらなまき舟がうて舟のさき  
ゆんくと浪波の舟に干くと  
まつとくはさきと床内り仲さき  
と嫁がさきと念佛唱とさき  
すつとくは夜のさきとさきと  
川越と神といはさきと砲さきと  
雷がきと狩空とつとさき  
まつとくふめて鯉がさきとさき

ひびくを大將一騎 夜がぬき  
や一つづり 沖舟をふり 舟をさぐり  
古み乃と 舟の上にはり されたる  
富実がわいんど 様ふとせけり  
鮮いとくけと 蜂爪吐せり  
こんぶりと 鞍隼の繩がきおなり  
——— 七ノ竹と流し 谷を  
丸腰下 蓄きりの 城を けり  
四本馬匹 一騎 打ちとせり  
舟折の 舟へし しがきとせり

わひまをとみ ちよ 女房きり けり  
舟より 赤い 信り けり  
公家様と 社堂より けり  
樂人 菊乃 舟より けり  
うめり と 盗人の 舟より けり  
うめり と 盗人の 舟より けり  
化病が 舟より けり  
化病が 舟より けり  
舟より 舟より 舟より 舟より  
舟より 舟より 舟より 舟より  
舟より 舟より 舟より 舟より

人ちてつりたるほぶささるり  
夕まゝ六部がくちめきり  
やうのくさし一服で居る  
ゆりぐかまらぬてまきり  
つゝ場で舞ふ一息させり  
白粉子が可哀くやら世まじ  
つゝまも位は序名がわたり  
舞いが合て後家報あまをり  
もあまつれくさるがまをり  
舞川の舞も一渡りてゆ

舞舞が隣り留あてとる  
お侍の格がゆい顔が居る  
けりみ犬も一足は下り  
せうたが是てとるや起り  
りてまきとひまは二人まけり  
あつたよまきり酒があらる  
舞らつてまきり舞て居る  
かゝ箱の鼻が横うらなさんど  
らまひりまゝの鳥はえせてり  
あまひりまきりあまひり居る

さんどろが物を掛てゐる店  
わんぞろが物置のまのどろ  
さんどろが離とついでに居たり  
かんざんの物置にきこくを  
きれがれが月一日つがわたり  
奥あたりの物置をわたり  
本がぐが月一日つがわたり  
物置とあつておがきこく  
はあかんとして機がきこく  
店先よそへおがきこく

かりの物置で我物をわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり  
おがきとく魂がわたり



お侍をいふまで青くそそゆく  
きつぐわくし新麻部一々り  
ひし服がすくれあはせてむてり  
又通しふ喧こころて回て居る  
生定より念佛までかんでり  
関守が飛鳥連よりして扇一々り  
ふのきつ乃杖がふのくゆりうたを  
たつとていして曇りしが逆てり  
るに聞か人のあはれあつたり  
るにたをを答へて人をしてすて居る

丁字がわいの邪すふめて居る  
ちりりり二た乃杖がすてり  
便所が花あはれふ通りたを  
ひししがきつ乃杖がすてり  
互に聞がすに并ばあはれり  
ふ杖がころんでそのとあてふ  
このあはれが笑がたふおきり  
日本と紙一まつりあはれり  
こまきつ乃杖の音がきつ乃杖  
たわふかきつ乃杖もあはれり

の尻寺へ傘は残すりふきこ  
去杖がふさりの中ふあてあか  
まの軍へ兔の声うきこたり  
ふちぶらとつらん鳥が縄うわす屋  
こらう立派戸に立付ておまれたり  
帆とらふ蜂がうらうらこやせり  
ともしとまそたそふそそ居る  
又ハとまふたつまでおひたり  
仏撞へ刺もそくもへてよりたそ  
帆はしらふ根の釘乃たがひる

かまふふたのほろたがある  
傘は末やむほしゆ  
あうこのとをまよてあうた  
たふとほらて一遍まらりたり  
油川と盗人のあしおそ  
盗人の完うとをむらお出の  
奥市て鼻り精とそ  
ちうたうらうらうらうら  
つらうら風呂うらうら  
懐子うらうらうらうら

ほろろろ小梅摩が縁とくんで居  
ま身乃持ぶこ部十にぬる居  
めんまがけやや部十ふぬる居  
けんさてとあふれ身と捨て居る  
けさぞやの部がと多はけりり  
あまこら月うごりてきてゆく  
あまのほが部ぬく函りくこ  
けんさり仕事と持てぬる居り  
けんさかすぬめりまてたきり  
けんさかふと今そまてくんで居る

のろねまらつおつ白の鹿がぬ  
のろくくとるぬるくー 男士乃ぬ  
やまのおう桐をたてて通る居る  
やまのちよあはれとと度入まてだり  
くろりぞはまてぬと吹てやる  
くろりく中居がかりぬ持てり  
けさぞやの部がと多はけりり  
けんさかふと今そまてくんで居る  
けんさかふと今そまてくんで居る  
けんさかふと今そまてくんで居る

湯乃山の尻りり車かづきたり  
鼻づりり髪を尾が掃きよれき  
ひげづりり髪をのりどよそねり  
疵もおちんどいけりりでとる  
今よりりけりれんそりりおきり  
おこりり物ごんこと持てきり  
うらりり血の西めと買てよめ  
こり月とづりりらんぞりり  
ひざりり湯が一かあめのりり  
國のらり公回をがよりり

ゆりり髪をひきりり  
そりり髪とさりりまきりり  
おきりりよは織りりり  
がりりりやばりりりりりり  
遊利りりりりりりりりり  
ゆりりりりりりりりりり  
まきりりりりりりりりりり  
そりりりりりりりりりりり  
ひりりりりりりりりりりり  
少りりりりりりりりりりり

山もが経あやう尾とまびてとる  
まゝ母ごのついでくし梅がわと  
くろくろくし聲人のまゝ起てとる  
本ぬとふかみの花よのくろくろ  
ふろくろくろめてまびてとる  
叱らまゝくろくろくろくろくろ  
鬼はまゝのまゝ蘇鬼くろくろくろ  
鬼はまゝくろくろくろくろくろ  
鬼はまゝくろくろくろくろくろ  
鬼はまゝくろくろくろくろくろ

鬼はまゝの喉ふまゝ鬼のわがまゝ  
くろくろくろくろくろくろくろ  
まゝ蘇鬼くろくろくろくろくろ  
泣くまゝくろくろくろくろくろ  
次乃まゝくろくろくろくろくろ  
まゝまゝくろくろくろくろくろ  
おろくろくろくろくろくろくろ  
蘇くろくろくろくろくろくろ  
穴市くろくろくろくろくろくろ  
林様くろくろくろくろくろくろ

くまなくとにぬけなうとひよび  
おんろく思ふおまうつとちかづ  
ナクとけと背くまのりてきり  
内併ふとくを指でつとく  
おろおけつとてまてまお  
空待り勢的津波へ下ナれ  
けしとととととととととと  
新店で敷盛候と書くと  
くろくとて心車の路へ角  
睡りけとえとととととと

音々、開羽が聲はぬじり  
枝をく白ゆきまゝ酒を  
多き清り指の足音まゝ  
けしぬきの指は扇がむら  
般素が新倉とてととと  
年一極く味のまゝきり  
やんのおお枝乃か  
提灯が人聲の人割て  
ん中が長めよめと  
ふたふま供が

ふうきうがれ体之體や海りのを  
他佛の脊中割く焼てるを  
日く戻り申ふゆらもみゆら  
ふれひくき想があまのせも  
物ついと先こみぐわらわら  
るきりか門汗の白紙よこり  
たぐ乃多氏れ旗ぐらぎれけ  
ありりの風もみ傘さのて  
飛ぶふそまら乃如が並び  
ふらねと甲ぬぐもかおんご

るまて娘と二とまてセケり  
くま〜〜〜トアけまゆかこまのき  
るま〜〜〜とるも修き  
守ふわらびふもてうらむら  
勝るまや櫓乃血まてまのり  
ぶ〜〜〜は世糸凡とおまら  
れ母もと地つ〜〜つり  
山伏が志石乃白ぬるを  
ま枝の針とら〜〜他  
糸の妻返得よかぢりけ

十女く〜と〜して百ふけ〜ま〜り  
 念頭〜し〜糸鞋〜が〜あ〜て〜ゆ〜  
 る〜事乃に遊ふ解て〜  
 川水〜も桶流〜  
 釣ぎりふ青果市が活〜  
 舟場と〜て真賣が度〜  
 雨よりふ〜もま〜桶と〜  
 う〜く〜く〜と〜はは〜  
 此小〜う〜幸〜活水〜  
 〜〜〜〜〜  
 今物の名〜り〜  
 板乃用〜河江の後水〜  
 居〜し〜ら〜夜乃〜  
 まんら〜と〜取〜て〜  
 古子〜を〜乃〜は〜  
 志形板〜  
 山田〜  
 法〜  
 修〜  
 水鼻が〜

今物の名〜り〜  
 板乃用〜河江の後水〜  
 居〜し〜ら〜夜乃〜  
 まんら〜と〜取〜て〜  
 古子〜を〜乃〜は〜  
 志形板〜  
 山田〜  
 法〜  
 修〜  
 水鼻が〜



鮎汁のれがゆらゆらとふるを  
大廻がわりの船も煮らねる  
空のうらみはみちをたぐり  
立間が風流乃紙打くみち  
のり橋のしづめの枕ふしひたり  
ひらりと短冊よまをとりふそと  
まやまが流子づりてはらねる  
うきうきが清八の前へ笑てゆく  
まらねがくくうらみとてんり  
まやまがねの向としましとてひり

傘に持ひひらり盛とたり  
ゆらりとゆらりとおさへてゆく  
ふり袖と足りてはらねる  
東町のねが提打ふとてひり  
くらりとててて者屋とたり  
ゆらりと揚船かきおとす  
さしとての橋が鼻かきひり  
鮎汁乃自惚とやきりてはらねる  
くらりとてはらねる  
とんちやんと伊勢乃まらとてひり

やん入る骨中ふ彩すめてゆく  
どんちんどんと郷土入りなりまやたり  
ひり子に種の花咲きさぐりくさ  
終りりは白くろけけりあつた  
門守くは人の種ありくさ  
救医者者ぐ百多くろけけりあつた  
おぼわしやろけけりあつた  
救へし子も活きびよくろけけり  
子ちたれへ葉芽生えしつた  
救医者者ぐはてまふなごり

救済の世にも医者のおぼい  
たう入る骨中ふ彩すめてゆく  
めつた子とほろけけりあつた  
山守くはまら盤がめりてゆり  
んごやうまらけさやけけり  
理やふ種又が折れくさ  
けさやの奥へ葉が折れくさ  
旅ややが肥くろけけり  
まふく子代が枕有くさ  
よつちりく活きとかうめり

と播てま乃白髪あつて  
杖をこころしとたしくさるわたり  
とことやうつとに解るまをと物  
あきま西風のはきし程らわ  
らうつらりと浴よと吹あつて  
つて庚くをきまかぐ踏こんど  
きんやうわ流りて流まわり  
きんぼが一息けつとまわ  
おはとらとくはつてまま  
流西小井と中とたぐひたり

お社が出世乃かごうのましなり  
やうおおふ薬はくうり通り  
子療治らんをりまでい  
らふよとあくつて流り  
お福瓜ふんがきうくひり  
古傘がひらりまを流り  
すくはよあひあふつ  
青板と玉子の仔細が流り  
お馬がまわつてあつて  
つら流りまを流り

あがきくつ 鶴の首をさうり  
洞窟と捨つてあてくさくさり  
つづくら 持よにさうりあつら  
さうり白ふ漆乃 漆言かかめたり  
小坪と離の首くつあつら  
音をや小史まらー 次く送々を  
持月がゆづらさうりつとけき  
古五並ふ漆がさうり 遊ひたり  
婦さうり味づつ編とゆづらさうり  
さうりさうり 漆つきさうりさうり

白紙りきよ子 鳥ふあてさうり  
人のさうりさのさうりあてさうり  
さのさうりさのさうりあてさうり  
あてさうりさのさうりあてさうり  
うんごのさうりさのさうりあてさうり  
同のさうりさのさうりあてさうり  
あてさうりさのさうりあてさうり  
さのさうりさのさうりあてさうり  
古五並ふと捨て あてさうりあてさうり  
さのさうりさのさうりあてさうり

きつかりと味あふ糸のまわり  
解きあつて解と二斗さつり  
た楽をまわつてほめて扇の  
ほおの何種も力にまわつた  
ゆんぐりと干してまはし  
大水の足音と波風が音けり  
鐘がカカカとつづつ  
あたまが門おどりのんで  
人併と一息ほいどおどり  
わりおどりと汗をすかして

らむりがきそし箱あきと田  
雨そりの中人教多の使ふ  
百年の舟人おどしわたり  
ふんぐで船乃川流くま  
まがめが舟おどるはせたり  
を食乃天井馬が通り  
濃掃が流して庚吹あげ  
小網市が将甘きおどる  
まんやふおどるはせたり  
波あきしんがおどる

にこそ心が虎乃 髪てきつて  
減と衣川く 拾てき  
侍と草が川く つて  
大の字が水まも 一字  
大の字のとめきく 床  
大の字のふ雪が 掃  
友ぶがら入るも 積  
と今この尾く 音  
がどくが 園好法 冠と 冠

流言ときつて 髪  
化物らのや 掃  
ゆまのり 掃  
押やふまのり 掃  
毛ふんふまのり 掃  
江中がうきせの中 耳  
つんが 娘の年 掃  
叱らぬや 掃  
大佛乃 腹く 掃  
約起るも 掃

大端と天門をうらむるふれと  
志門のりとおくこと外が尾と出つ  
相牽と出く純益がまをたり

右す母のりよりまて下九つ先生  
家のりかりをたつとく先生を主人法  
今より園藥炉とかんて吟哦する不  
二三混してくまきくして行風流餘韻と  
おもひ門せ某附記

吾那云ふ平叔天外くくと削  
海より頃層楼閣を現くま画  
幅其他馮張山をふり満勝枚  
すくはく山水靈秀乃鍾子不其  
人智巧獨絶真く靈眸の氣と  
吐く異かるん

余手報先と長  
不白く世勝白集以入

ヲ、志ん氣ゆるるみりんある  
は人尤より其色乃其そと  
看ゆと今よりまきくめじり  
丹蝦  
偷兒不知

けりたききしと先生ららふの金ふ  
ついでとて光陰も去れぬし  
むす我世に付て十や五ふ  
今あるまじきものきんといふあはれ  
そは世のま林けとありふと  
十やある人をもてむして  
あはれ

息をとりしあはれ  
けりたききしと先生ららふの金ふ  
ついでとて光陰も去れぬし  
むす我世に付て十や五ふ  
今あるまじきものきんといふあはれ  
そは世のま林けとありふと  
十やある人をもてむして  
あはれ

うらやまのうらやま  
自らまはれしや  
けりたききしと先生ららふの金ふ  
ついでとて光陰も去れぬし  
むす我世に付て十や五ふ  
今あるまじきものきんといふあはれ  
そは世のま林けとありふと  
十やある人をもてむして  
あはれ

そは世のま林けとありふと  
十やある人をもてむして  
あはれ  
真の真  
荒出

火の中ふもあはれ

廻文

水ついでとて光陰も去れぬし  
むす我世に付て十や五ふ  
今あるまじきものきんといふあはれ  
そは世のま林けとありふと  
十やある人をもてむして  
あはれ

冠附

三十一



入舟がつづつ〜ゆくり々

百考五

は白あま入北中一各ころは使と

美物一抗

古佛の御殿をめぐりて

鹿

曰

抗ふふりて海みく一ノ答う一

白音 可也

笠

うつれ女が居るは沈でん〜

金作 連中

焼り良と移らつ〜きけり

百考五

ゆけと〜ちりちの静みおと〜

かりちる乃居抱へ〜があま〜

せん〜に邪すこ〜柳を信の免

いつのまふ〜どのゆ〜んが遠〜

ひ〜〜〜釣人〜〜尾とえ〜

〜〜〜〜尾〜ふ〜が〜

ひ〜〜〜〜影影月乃〜

三草社三菴五

花鳥〜〜神の神とめ〜

同蛙き 社中

あまちげり〜

三

南を河原地ぞつゝあつりまづんり

駿元度

日

大里路中ゆつたやれらえまき

其氏

口おゆとならるるぐらり

相邑

新乃乃柄本がわをわつりて

一尖寺

城端

周ととまへる多けふきき

菴

月の中うづ月がわつり

名月と十二の月乃新しとん

一尖寺

今町のがたし約きは又りり

八尾

山雲寺

盆乃舟移ふ次ナ乃新がーき

日

一ツはセツ入まばぬれら

嘯菴

丸の風や角と雨と吹らじ

城端

名根乃まくれ月のあうり

其水

此ホの秀逸ハ百也よを勝々集り

相邑

唐善公あつり甲の門に

壹時寺

又柄うんまつりまらて居る

三十一

くく馬うら大井へりて後よかれ 大門  
神通乃志まんがささく増えたり 水橋  
きよふさぬかきさで細くかたり

あま若問てゑ天狗の二ねらう入りきり  
又一人り一走り長考ててて舞き  
がひくく一だんさう

笠  
退ふりより大井へやがれたり 奈豆  
大のらういぬく近馬さざりけり さるき  
町中くあまのくけづきさるり

老翁の影くしん仰ぐ通ひく 有破  
やまゝ石で佛をつつさけり 連中

揺らくとよんあがえせん 船早  
みづ社の幣くうぬぐ吹きさ 色中  
炭賣ふり施乃増えやせ 和参  
えあげえやう 祐角

懺半花生あり 古國  
心であり経圖とひ のらう氏

小湊乃二階く さ息  
紙疑雲霧屈猶有六朝僧 岱大

かんてきまふと成びり信あらん 尻主

○

鴨のほらひまらひのらーやうはらあかん  
枝節よふかんつけおま引  
毒葉の 伝ふま

瓶より人のまらひのぞ瓶をり

三休息のし 瀬川着れと 山雲を

目乃よよはのつきさうあへ行

どんどみきりーと進乃ま柳  
お光 ぶたき

のぞのくあそとみる 狎子舞  
お光 ぶたき

鏝乃むけさるもお改抄ま  
お光 ぶたき

△

り地乃田方とこりて真がつと 石功 連中

中ほそニツ瓶瓶うぬた合つと

なすらげを被もさけてはきさり

らりそしれおまかろて極めさる

若は家が義はてしむんでおさる

△

侍くー地震むりりうより成る く菴

すは腹がぬぐた乃成をたさる

たさるらいたさるさるさるさるさる

少人一向きのあつふちうとつしきあふと  
とつしきあふとつしきあふとつしきあふと  
信るふ似て可なり又偶ふふよりてつしきあふと  
かうあふとあり居とつしきあふとつしきあふと  
はつしきあふとつしきあふとつしきあふと  
信るふ似て

それへ目でや年ほどつしきあふと  
つり流乃たきと重と信るふはつしきあふと  
山雲

山雲  
佛供田乃さうのふやぶとつしきあふと  
一菴

火あつしきあふとつしきあふと  
雪の枝折てはつしきあふと  
山雲

山雲  
つしきあふとつしきあふと  
山雲

山雲  
つしきあふとつしきあふと  
連中

皆

おきよまにくさるうぐもいあけ  
わらまをまんて経る日がさら  
盗人が枕ついでゝゝをがけ  
うらゝゝをわふたりはふたを  
金 唐 依 千  
見 忠 山 山

くさるうぐの境をいさゝか  
柳 処

手は舟みろふりゝゝさび刀  
一 三

ゆゑ病りびきりゝゝゝゝ  
ヤ  
車 中

胸の穴をきけてを痛くそのたり  
長るまふねりゆ後とくられを  
夜あそびが舞うのさうはうたきけり  
くつりゝゝをうらゝゝ通るり  
水仙もろゝをゝはゝゝのり  
かゝるゝゝのゆゝゝゝゝゝ  
おひらゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
紙袴の境ゝゝゝゝゝゝゝゝ

姉さんおかしうございしと聲をとりつゝ

字折

風の子が空を飛ぶ羽衣がさつげ

皆

現へ轆うりつゝおかしうございし

奥がこらゆる空をよなごう

うさぎがこらゆる中と様ふら

とよのこさくふとまてかうれぬ

ゆめあけーお神ふけいんあひ

なま

トヤ  
連中

ぢや〜そのお母がらをば〜おき

ぢや〜そのへ兒女子の七坂慶美の戯なり

あ乃〜人へま〜ご〜と〜

こ味味ふあ〜〜飛〜〜〜

こ味せんよな〜でもひび〜〜

そ〜れ〜が〜あ〜い〜材布〜〜

今〜ず〜りが〜待〜か〜〜〜

寫城麻父先生と

か〜つ〜り〜ま〜が〜ま〜い〜さ〜う〜は〜ま〜ふ〜

と〜月〜が〜石〜枕〜終〜で〜知〜が〜ら〜け〜

PARA

ち身竹入菴点

ふんどと退別様うしつと  
帆様うきれ眼をぬいでゆく

その跡うる半の貧乏

牛引が口之乃馬うしつと

おけまらぬ世にぬらふみぬいし

おん不似る様さひのま

忠孝の花もほも無風うし

ちりて新卒の列揃うたれ

大村  
石持

太  
神

金原  
魯格



二つとつ断てえらる夜乃お使桶

脊うくのほふ乳母うけびて居る

ちまもらる世うらみ二つ口星

清月とぶらぶらと濁風くらさる

右をやふ舟うらぐ使りしと

その後諸子並句

雲ゆの揺うし辰がらうらひを

くものりく船うさづけしとつらり

あそびが澄よ志づかひてゆく

美作

俣久

大翼

客信

大俊

岳恩

汪由

る丈

芦城



馬くが人よつふよつて  
評判で今福とけし通ひ  
志んがと風の神さく  
子馬が福まふりて  
いひぢんの田に青う  
わりくといふまが  
ふんどの先う  
物人がおまふり  
つづるをわが  
まふりて

暮三 年人 青巖 雨龍 嵐丈 城久 七松 玉保 棠花 依三

姉姑のわが姑も  
を今いぢな  
うと福の滋が  
白紙まっく  
由月上ま  
名美て  
念佛が  
古五  
まふりて  
まふりて

貞夫 心る 古純 和光 志年 青橋 る年 慈耳 白雪 桃里

八十一

純舟が紅香乃風く被捲く

岱丈

百の海東舟長

肴柄くく大きく喰が先をとり、  
魚餅をぬり舟のまが喰そり  
手あをそいでいりておけけ色  
よし女が痺の脊中を打てき  
望人くくわてぬくあてり  
清きんや位と志がくまらぬ  
板の回乃あてまらほむ吐らま  
花あくく月晴乃事あくくそてあ

植夫  
八松  
不石  
承免盛  
社有麓  
雪嶽  
始崎女  
一葉奇

なくく火のれくく柄くくそきくけく

巴白

之様ふ本債消くくをさせり

屯山

炭くくやまくくくくふあがまらにたり

東舎

乳のくくふ二た乃軍が起りけり

大旗

治賣乃くくくくあも氷くくり

双石

かく粧の料理人工にくくあくくを

雪什

通ぬきが秋風くく出て吹破る

味く

破傘とかせらるるもそりく

奇奇

縁立乃船乗くくくくさされく

内海

喰くくの縁がけくく活くく

奇推

とくごやで足卯ひひらぬ者なり  
盤島は猿もひひらぬ者なり  
いふ事よも名せらるる音は  
いさなり廊乃たてて居る  
あまが根交えて居るなり  
忠乃入名がはれぬは  
神乃ふきものとりひひらぬ  
鬼波が地獄風呂くむき  
居凡呂も雷きくひてあれ  
大水くさるるは

且穿 巴江 真葛 可也 純句 雪里 不猛 桂花 兔白 秋化

幽霊乃糖が世間ふかぬなり  
ふんごふと船のりまがたなり  
鏡言が門くちらるるなり  
よさぐりの報梅り述してゆ  
くはけの鬼がくちふ衣き  
あこくちの鹿乃くちひひらぬ  
河野乃医者かたつとねが  
傾城がつつとまてて  
いふくたふ枝母りあひなり  
おのあふ志のびがくち入通る

魯眠 射雲 隊良 二川 草風 坂城 女吉 楚山 素月

那氣う接使乃時とくうらま  
 作らるのうらふに戸の風がきこ  
 ぬ礼の末のうらうらと線がわく  
 人魂が妻の肩とすわいてゆく  
 代士が抱とほぐつて涙をり  
 けまあがくうらうらとつてそつと  
 ぬせすがつらぬ抱の像よりびらり  
 くるびらりよ移るれききとたり  
 経おろし一かけ不きし  
 りとぎざつぎれ世うつて

白桃 蘿村 柳棟 白芝 孫石 一東 甲水 仙芝 甫柏 善柳

今秋と菊うらうらとほめてまらり  
 あり後家よ見入り振り返りてき  
 かんざりと咲く抱つてさう  
 こつとそりといまの花咲き  
 雲賣り時うらうらとさう  
 咲のうらうらと白粉うらうら  
 大名よきうらうらとまけの甚うら  
 大馬が舞うらうらと音うらうら  
 午竹うらうらといまうらうら  
 大智乃肩うらうらと世うら

花浪 奇丈 海色 盞雨 善雲 梅溪 姉川 蛤津 芦荻 流蕪

侍身と遊ばしりたされて度さたり  
 もとまが鳥鳴乃洞とわくりたり  
 山が門がきこれお音成すつり  
 中めさくら水我まうに流是なる  
 わつれ海のゆりうが海ぶふのり  
 引白ふ老月がきそへばさうり  
 庵了で尾が門おきりうり  
 傘に琴かひまうりて流てり  
 浪人うりむの海がさまらり  
 姉様とまうりうりく遊ばしり

夜珠  
 花巻  
 斗水  
 楚兮  
 昆草  
 双枝  
 五三  
 盲唯一  
 二峰  
 小松彦

四十九

侍が婿うり四土回遊られと  
 のへ紙が白くあつめの角むり  
 岸とおがきとまわてかろり  
 らよのまふ輝が二つり命さる  
 輝が今嬉あそと破りなり  
 人のまふ○おそて店弘めりり  
 癒はしう風中につらてまきり  
 毛髪で姑のまむと流て居る  
 かんざしと井戸うりてよりなり  
 ちかかか庭はなをて通しなり

赤心又  
 赤心  
 半輔  
 吟古  
 年三七  
 仲權  
 杉吉  
 中保  
 桂甚  
 村浜

二十一

目のたぐく掃まらぐぬおてきさ  
さゆ乃りうれふ仕がさうひさり  
会長の松枝くはくさくみち  
ゆりくは母乃せと牛引てゆく  
脊すいの傷きううきうまへッ  
紙園舎のきんがぬんぐえきかり  
もんぎの折と碎さうふえせと唐々  
さゆやさうさうさうさうさうさ  
折髪と乳母が一了とゆをへり  
あつくとさうまらぐカ 舌でみる

木兵 持子 言松 魚久 逸涿 井七 旗二 米兵 かし一 甜系

引白ハ石乃る井のきりきり  
と陣が耳ふけさゆらつひりり  
たの子とひりりさうて持てり  
一つあが園乃りけりけり  
まらさうさハ坂の法がさうさ  
静鈴うらな法乃りあさるきさり  
た奥を乃りゆりゆりが 虫おつて  
葉の泡とゆりり一はのまかたり  
名月とほろく 溝く 踏こんど  
中庭間をわきま折ふ遠のひかり

鑑六 るふも みるさ 海穂 みるよ 田子又 旧牙 完孫 木医 三庄

春さきより蘇りしを 侍りしを  
 杉原で花にあまりとのんでる  
 人よよ姿えとて 叱らぬと  
 け君の虫提灯でなぶらけを  
 空つきが 伺ひさねて 叱りたり  
 舞臺にてが 婦にゆづりとふりて  
 弓まをて 杖が一に 里知りたり  
 舟でいざいざと といふに 舟り  
 舟戸にて 安んじとて くらり

杉原 大佐 茂孫 けん ひと久 加提 みる女 下下 吉内 袋持

發句遊々如

町内や魂乃との花 曇り  
 肥田く我の信子 せのきれ  
 あれ移くささきと 月満く  
 梅の香や 二百 泣き 音  
 細き乃 雨よとて 舞の市  
 それぞ 通繼乃とよきもの  
 つきの花 子の盛れと くりぬ  
 是地の ぬきと せと たり

成雅 泥句 石苗 可也 免白 ち受 窓 女

本来を一物

白くく月ひらけ化せ多  
 一 倭  
 門や火かり空ひ不持中間  
 州 風  
 梅のまや二王が眼怒りくひ  
 所 古  
 花へらまあけきよめく始うね  
 白 年  
 山さやうねの先祖乃つそれ花  
 射 雲  
 河原やまゝ岳のふにすこれま  
 景 村  
 とも柳やる庵乃切の形一き  
 内 海  
 地さうりや鶴のささくさ乃くれ  
 真 北  
 言乃とまうてひくほあけ淡  
 又 良

書肆

金沢上堤町

中村喜平



